

COSMOS集



紅の電車

内藤 丈子 福井
「あすなる集」特選

水しぶき川面に上げて投げ網は九頭竜川くづりゅうがはの落鮎おちづなねらふ
敦賀なる海岸を飛び白鷺は木の秀ほに止まる気比けひの松原
蕎麦の花かき分けるやうに紅の電車が福井平野を走る
蕎麦の花摘む母の背をさやさとしづかに撫でる新涼の風
十五夜をともし愛である母のゐて我の心を濯ぐ月光

みそか 伊藤 祐 楓*茨城

このごろはうかつに夏をむかえられず猛暑酷暑の危険な暑さ
家康を好きになれない高野さんわれも同じで手紙書きたし
ひと月の疲れ捨てたきみそかありされども今日は燃えるゴミの日
秋風にカーテンはゆれ(本当に大切なものは目には見えない)
五時に起き短歌雑誌を読むわれがりピングにいる秋は来たりぬ

揺れながら 前中 映 東京

人だけが距離を保つてゐる夏のゆふべ堤にもつれあふ犬

遺影を撮るやうに桜を撮り終へし男が幹を伐りはじめたり
夏草に身をしづめたる柴犬の鼻先が子と会話してをり
揺れながらバスが渡つてゆくときに橋はもつとも美しくなる
枝豆の殻を器に投げ込んで投げ込んで不意に濃くなる怒り

風車の丘 吉田 真弓 北海道

見上げたる風車ゆつくり回りをり松前過ぎたる海沿ひの道
大男影からぬつと出てきさう数多の風車立ちたる丘に
朝晩の寒さ身にしむ十月は小さきストーブつけたり消したり
昼過ぎも室温上らず寒きまま遠くの山は昨日冠雪
長き冬思ひて心落ち着かず忘れてゐること何かありさう

ひえた言葉 石田 信 夫*鳥取

バリカンの音の軽やか丸刈りにひと月分の煩惱も剃る
浴場の木椅子に凭れ舟をこぐ老人の手に角川短歌
ほどほどに疲れしプールの帰り道いつもの店で甘酒を呑む
弁当をレンジにかけて「孤食」というひえた言葉を温める夕餉
稔りとはピオーネ一房掌にうけてどっしり重い果肉の弾み

抹茶アイス 義原 富喜子 鹿児島

鳴きしきる蟬の声のみ聞こえけり暮前に二人手を合はすととき
草引きにひよつこり合ひしッルポの花ブローチのごときピンク色の花
神無月に小さな花芽出だしたる紫陽花に水をたつぶり注ぐ
庭仕事のほうびと食べる抹茶アイス喉ごしひんやり暑さとけゆく
「世界遺産」を追ひ風にして鳥唄を世界へ送る里アンナさん

わたりの準備

樋 口 八重美* 広島

いくたびも燕返しをくりかえし子つばめ今日もわたりの準備
つばくらの大群さりし三次には鴨^{みよ}わたりきて水面に群れなす
猫好きの姉は帰省のかなわぬ娘の名前で野良ねこを呼ぶ
うたうこと自粛されたる教室で音楽鑑賞打楽器演奏
お互いに一人となりし妹と液晶画面にひととき過ごす

豆腐を食べて

水 辺 あ お 静岡

まつすぐに降る雨やさしなにもせぬ一日まるごと夕闇に入る
目に見えぬ電波が屋根を越えてゆくへこいつ嫌いだ(あいつ許せぬ)
頬杖をつく秋が逝き腕組みをする冬が来るコロナまだあて
腹黒いわけではないが真白な豆腐を食べて一日はじめ
秋の夜のほりまや橋の短さに行きつ戻りつ言ひわけを書く

亡き人乗せて

馬乗園 恵 子* 宮崎

墓地横にほてい草咲きそれぞれに亡き人乗せて秋風に揺る
飼料稲 一気に刈られ丸めらる青空に雲一つもなくて
さらさらと夕陽に輝くくもの菓がとおせんぼせり我が行先を
くもの巣に散歩はばまれ秋の日は行方知れずになりそうな夕べ
暮れ方にオレンジに輝り表われるへオーストラリアの月への階段

セルフレジ

岸 下 澄 江* 鳥取

セルフレジはレシート取れと急かしますわの手順を少しは待って
体脂肪なんかどうでもよくなったネットメロンを一気に食べる
庭に出て星を眺める夫とわれ今朝のいら立ちゆるるとける

子育てに通ずるものかやりすぎた水と肥料で花を枯らしぬ
(大地から米をいただく)口癖の農家の友は日々感謝する

栗 飯 の 香

高 山 幸 子* 三重

炊きたての栗飯の香のひろがれり「ただいま」の声跳ねて入りくる
タブレット器用に操り八歳は居間に正座し授業を受ける
オンライン授業はじまり八歳の笑顔えがおが画面にならぶ
「棚の上」脳に聞かせてメガネ置く忘れ物多くなり来し日々
風に乗る運動会の練習曲そろそろ大根の種蒔きをせん

昆 布 重 た し

中 居 久 子* 岩手

荒波を二つ三つと遣り過ごし波のあい間に磯浜渡る
波乗りを楽しむ如し真昆布の足は海底にしっかりと根を張る
潮騒の音を聴きつつ昆布干す腰を伸ばせば沖を船行く
干し終えてプシュッとひと口飲むラムネ五臓六腑に染み渡りくる
湿り気の残る昆布は重たくて背負うロープが肩にくい込む

M I N A M A T A

井 上 啓 子 愛 知

どうしても見に行かなくちや「MINAMATA」を 予定振り替へ車走らす
米国人ユー・ジン・スミスが魂で撮る、水俣の青年の指
布団干す今日の幸せまつ青に彼岸中日の空晴れわたる
花活けは週に一度のボランティアつる付きの大き鈍豆を活く
食卓を机に変へて午後の九時「コスモス」開き歌書き写す

大 阪 の 義 姉

園 田 洋 子 福 岡

蜘蛛の巣に小粒の真珠を編みしごと秋雨降りて墓地静かなり

枯葉踏む音近づけり杳き日の君待つ夜や秋深みゆく
バスローブ結びつつベランダに出る男くつきりと見ゆ灯り背にして

大阪の義姉の精力半端なし木によぢ登り枝切り落とす
ひやひやと梯子押さへて見る先の枝切る義姉は七十五歳

白馬連山 小島 りき子* 神奈川

彈丸登山で富士の来光拝み来し若きに励まざる二合目
登りきて間近の白馬連山をたちまち隠す音なき霧が

そこここにくずれし顔の石仏の草に埋もれぬ塩の道の辺
足すくむ狭き尾根みち友どちに励まされゆく高所恐怖症われ
塩の道運ばれて来し海の幸あまたいたたく白馬のホテル

昭和のわたし 西森 恭子 高知

外来種の小鳥ならむか聞きなれぬ一羽の声が透きとほる朝
捨てられず仕舞ひおきたるブラウスに袖を通せば昭和のわたし

一對の家守夜な夜なガラス戸に四肢の吸盤白き腹見す
草深き廃家の庭に柿熟れて山鳥一羽しばしばさへづる
檜扇の「ぬばたま」に照る秋の日に昔をしのぶ日本のことば

十三 音律 中村 京 兵庫

月に搗く不老長寿の妙薬をうさぎよ少しのませておくれ
天窓にさしくる今宵の十五夜が家のお勝手まがらをキツチンに見す
秀つえにて実る富有のもぎたてはほのと真昼の微熱がこもる
大谷の母でも祖母でもないけれど祈る気持ちに最終戦観る
琴一面柱のごとく突つ立てて五十余年はみごとにすぎぬ
調弦を友はすばやくとのへて十三音律かろくはじくも

杉の切株 大沢 律子 岐阜

泡立草、黄花コスモス黄の花の幸せ色を籠いつばいに盛る
秋海棠、秋明菊は花なるに愁につながらるさみしき湧けり
春切りし杉の切株腰掛けて秋おだやかにゐさらひぬくし

難民の子ら思ふとき新米のおむすびいつばい食べさせたしよ
自転車を漕ぎゆく友の田の径は地球にやさしくあかまんま咲く

横旗 宮地 正志 香川

山里で旗を横にし地名とせし「横旗」守る平の子孫
「横旗」に平氏の裔こゑ住まひけり氏神祀り生業重ね

「横旗」の八重山染むるもみぢばは平家の榮華描くが如し
遠山を背景に咲くコスモスにとんぼ飛び交ふ郷は和やか
幼少時徒歩でひと日の母の里今は車で三十分なり

旨寝 寺田 一見 神奈川

秋空に高圧線がくろぐろす 総理は岸田文雄に決まる
なんらかのお役に立てたであります今日八十五すこやかに生ふ

山田さんに貰ひし満天星に付きてゐしまんじゆしやけなり庭をいるどる
彼岸にて先妻や娘も聞きてゐむ境木に鳴く夕蟬のこゑ
草刈りは葉なるらし山家より帰りし夜の旨寝うまいすごいらし

危ない 山本 竜作* 新潟

赤き月昇れる秋の縁側でシヨパンの「エチュード・ノクターン」聴く
真夜中に悪夢に目覚め壁見ればダヴィンチのモナリザがじっと見つめる
危ないな痰が支える飯が聞えるそれでも恋の血潮は滾る

空に満月に月見草しみじみと見比べている吾は鈴虫
齡ごとに重くなりくる脚ほぐし今日の日も青い地球をあゆむ

足の屈伸 大井藤子 長野

夜八時中秋の名月見ゆるかと窓開け拝すまんまるの月

コロナ禍で外へ出られぬ日常で蟬の声聞かず夏は過ぎたり

腰曲げて杖つく姿がガラス戸に写ればフツと足の屈伸す

西空に北アルプスの山並がうつすらと見ゆ夕暮のとき

台風十六号は雨もなく無事に去りたり夕陽が赤し

松風 島夏 樹*宮城

煙突をあたみに立ててもじゃもじゃの独り善がりの一生をもやす



「その二集」特選

ふらりきこ 高橋 梨穂子*新潟

祝福のように飛びたつとんぼたちなにもない日のあぜみちゆけば
ふらりきこ、ふら、きこ、秋のブランコはみずからふらこふらここと鳴る
雨音があなたの帰りを待っている孤独なときをふちどどつていく
傾いていると思っていた床にこぼれた水はとどまっつていく
疲れたと言葉にしたら負けですかパンダのことを考えていたい

すこしずつそれぞれ子たちおとなびてひとりひとり線の香花火

樹を枝をはなれず遠い昔からとおいむかしを唄う松風

秋空は雲たべつくしひとときのあおひというの食休みの時

みずからの隠れたたちからあつたのだあおいふしぎな月夜のひかり

ひんやりの秋 相森 野志恵 佐賀

愛用せし母憶ひ出づ「天花粉」いまだにわれも毎日使ふ

ドンゴロス解きて母が作りたるランドセル背負ふ六ヶ年なりき

「親ガチャ」の言葉を知らぬ幼子が虐待死受くその命はも

家まはり七日かかりて草取れば最初の場所に早や草が生ふ

五、六分車庫にて遊ぶ白鷺がごと首伸ばし川へ降り立つ

目薬を注したかどうか忘れゐてひんやりの秋心細しも

カノン 谷川 恵 埼玉

湯豆腐を受けつけなかつた消化管けふのメンチをむぐうと呑みぬ
消灯時バチンと鳴りて起床時はしづかに点る病室の灯は
健康にならんと完食した夕餉 支へられないよわき胃袋
胃薬を飲めばくすりが増えるからカノンを聴いて息をする夜
茹でたての卵を剥きてわたくしも卵であれば楽かとおもふ

夜半の小蜘蛛 尾花照子*福岡

電話する母のかたわらさくさくとセルフレジをすます八歳
「西高の学食安くてポリユーミー一般の方歓迎！」とあり
ミッシヨンインポツブルのごとテールへするり降りたつ夜半の小蜘蛛
思い出に溺れるように黒揚羽プールの解体現場へと消ゆ
生きながら透きとおる身のかなしみの海月の一日女の一生ひよこ

矢 大池 アザミ*兵庫

カーテンが風に押されてふくらんで形を決めぬものは気ままで
こんな日は何度もあつた雨の音聞いてなんにもできずにいた日
高らかな舌打ちをして遠ざかる手足の長い美しい人
水たまり踏んで破れた青空がまたわらわらと形を成した
たくさんの人がそれぞれ何か言う善意悪意の関係なく矢
古書市で買ってきた本とりあえず置かれた棚で眠りに入る

アデユカヌマブ 鹿江妙子 佐賀

先鋒で負けし選手が耐へて言ふ「ふがいないです」涙は無く
薬代は三千元で足るところ万札三枚間違へて出す
歯科予約続けて二度もすつぽかし詫びる勇なく七日を過ごす
ワクチンの接種も終へて平然と九十八の母今を生きたり
コロンボの愛車のごとき(ナシヨナル)の洗濯機もて三十年経る
わが身には間に合はずとも明かりなり何度も言へる「アデユカヌマブ」を

父のTシャツ 人見江一*神奈川

一泊の旅さえ控え二年目か三密を避け行きたし四国

不覚にも母校の校歌の作詞者は木俣修と今にして知る
亡き父のTシャツを着る休日父をまといて心安らぐ
本代と結社の会費、切手代ほかにかからぬ歌を詠むのに
亡き父の通ひしデイの便り見る誕生月の笑顔の写真

指月から月夜田へ 福本郁子*京都

ないものを追えば気持は暗くなる雲より出ずる月の明るき
指月しげつから月夜田つきよだへ月渡りゆく極めて明かし男山の月
白桃の沈むがごとく動かざる白昼の風呂おんなささまさま
泣き声に怒りの混じるみどり児よはるかな時間が広がってるよ
老いとは乾くことかな肌かわき心かわきて淡くなりゆく

朝 霧 奥 呂美生 東京

ゆく水も野川の橋も霧の中ひそむけものもゐるかと思ふ
朝霧にすべてのものがつまれて我が気がかりも消えゆくごとし
馬場よりの馬の足音はるかよりとどきしものと聴く霧の中
歩くほど霧はふかまり立ちこめて逝きたまひたる人に出あふやう
朝霧のふかき中へと行く道は物語へとゆくみちのやう

さるすべり 多田 美慧子*宮城

わが町もなかなか捨てたものじゃない学校ふたつコンビニもある
陽が差せばカナヘビの子がちよろり出ずお前と遊ぶこともがない
山菜莢は難しい字だと子が言えりやマグミと読めば親しみて聞く
さるすべり木槿のいづれを伐るべきかわが家に長く咲きたるものを
さるすべり細く残すを決めしときばらりと剝がるその赤き樹皮

秋 だ 一 ね 川 越 三紀子*宮崎

秋だねと姉より届いた写メールに咲き零れいる白曼殊沙華
かがみこみ姉は何度もシャッターを押しただろう白曼殊沙華
くるくると重なり離れ舞う様の美し妖しキオビエダシヤク
黒アゲハひらり舞い来て蜜を吸う黄のリコリスを抱きしめること
夏バテの特効薬のらつきよの最後のひとつ十月二日

いのちのあかし 田原五郎*京都

雨上がり季節がゆつくり流れてるいつもの川の水かさ増して
父母がふりむき何かささやいた秋のはじめの静かな夢で
老人が子犬いだいてなでているいのちのあかし抱きしめて
走り去る影の向こうに見えるあす自転車に乗る少女が二人
吹きぬける風の冷たさ気持ちよく生きてることが幸せなのか

当 部 集 落 植 田 カズミ 鹿児島

夏を背に日焼けの少女、真つ白の仔山羊とともに跳んでは駆ける
木々揺れて時をり温き風通りもの、け姫の出さうなお社



当部集落清水が湧きて黒ウサギら長閑にあそぶ隠れ里なり
道の辺の無人販売のピーマンは夏の陽やとしてつややかに輝る
朝なさなメジロ囀る空みれば「ゴチソウ、ゴチソウ」とパイアの実に

どこでもドア 福 島 健太郎 神奈川

何ごとも起こらぬ午後のためたへり二羽のガラスの何かささやく
石段を踏みはづし倒けたたかに顔面をうち紅き隈どり
病院の診察室のならばドア入つたらもう戻れない気がする
足腰のしだいに弱れる老人に「どこでもドア」を売り出すらしい
ドラえものの「どこでもドア」に老人の価格表あり少し高額

アフガンブルー 池 田 あつ子 愛知

壊されしバーミヤン大仏の悲しみを受けとめる空アフガンブルー
平山郁夫「シルクロード版画展」の醸すしづけさここは異世界
小品の「アフガニスタン少女像」口を結びて正面を向く
晴れ晴れと台風一過を咲きにはふ芙蓉の根元に昨日の花がら
はるかなる西方浄土ありやなしや秋分の陽のビル街に落つ

スマホデビユー 戸 田 セツコ*広島

入道雲くずれ筋雲うかびおり三次盆地の行き合いの空
初恋はいまなお青し舞台なる初任の山の学校の春
青春のわがががやきと重なる山の学校のこぶしの白さ
ようやくにスマホデビユーの八十九ゆび先うるうる迷子のように
スマホなど知らない夫に手向けむとトップ画面に彼岸花咲かす